

令和八年九月号

《第百六十五号》

しるへび

宗教法人岩國白蛇神社

〒740-0017

今津町六丁目4-2

☎ 30-3333

長月の祭典・行事案内



【月次祭】 九時半

四日（金）

二十八日（月）

七日「白露」

九日「重陽の節供」

二三日「秋分の日」

【昭和天皇御製】（第一二四代）

「稚内公園」

樺太に命をすてしたをやめのこころ
を思へばむねせまりくる

「宮殿竣工」

新しく宮居成りたり人びとのよろこ
ぶ声のとよもしきこゆ

（昭和四十三年）

「靖国神社百年祭」

国のため命ささげし人々をまつれる
宮はももとせへたり

（昭和四十四年）

【白蛇供養祭】

八月十六日

午前十時参進太鼓の轟く中、第六十二回岩國白蛇供養祭（慰霊祭）が斎行されました。主催の（一財）岩國白蛇保存会会長をはじめ、岩國市議会議員・岩國市教育委員会教育長、吉川家事務所・岩國商工会議所・岩國観光協会・今津山手連合自治会・天神町自治会等々の代表の方々参列の中、修祓・降神の儀・献饌・祭詞奏上と続き、玉串奉奠・撒饌・昇神の儀・閉式の辞により恙なく祭典を終了致しました。



近年白蛇が減少の傾向を懸念する中、白蛇の長命と健康を白蛇の御霊に懇ろに祈念をした次第です。

【合同の大掃除】

八月九日

総勢四十名による保存会と神社の合同大掃除が午後五時から行われました。用水路・境内の除草、そして、拝殿の欄干等がきれいに磨かれ、一層に清浄化された神域となりました。神のお使ひとされる白蛇もさうですが、神々も清浄化された処を良しとされ、その御神徳をうかがふことができました。

八月十六日の白蛇供養祭を一週間後に控へ、全員が猛暑にも負けず清浄化に励みました。改めて感謝を申しあげる次第です。

【推薦図書】

『約束のあと』 小川榮太郎 著
（安倍晋三から高市早苗へ）
飛鳥新社 千七百円＋税

七月八日、安倍晋三氏が襲撃された事件から四年。

本書はあの日の衝撃から始まる。そして、それ以来の日本が試行錯誤と混乱を重ねつつも高市早苗政権成立に辿り着くまでのインサイダー・レポートである。

安倍晋三なき日本。それは、安倍氏の非業の死への慟哭が日本を覆い尽くした後、突如、テレビメディアが安倍氏と旧統一教会とを結びつける根拠なきナラティブを流布し、国葬儀への執拗な反対キャンペーンを張る異様な電波ジャックからスタートした。（略）

かつての安倍晋三は、こうした圧倒的な左翼支配に、極少数のスタッフで挑み、鑑定と保守論壇に立て籠って戦った。「戦後レジーム」の側から見れば、安倍晋三こそが反逆者だった。だが、民意は次第にこれに味方をし、安倍晋三はついに歴代最長政権を築くまでの国民的信任を受けた。したがって、安倍氏の暗殺とは、まさに「戦後レジーム」からの脱却」という民意そのもののへの殺意だったと言える。だが、民意は、その暗殺を乗り越え、ついに高市政権の樹立と、立法院からの左翼の追放にまで進んだ。いまや、我々日本国民は、立法院以外の日本の頭脳部にまだ幅広く巣食っている左翼支配と直接対決すべき段階に達したのではなからうか。日本の情報や頭脳部をこれ以上、ガラパゴス化した戦後左翼支配に

任せておいてよいのか。その戦いに進むためにも、安倍晋三から高市早苗へとバトンタッチされた戦いの経緯を、ぜひ知って置いてほしい。それが本書を世に問う最大の動機である。それはまた、戦後八十年に我々が失ってきたものの、粗末に扱ってきたもの――つまり日本の素晴らしさの数々を取り戻し、新たな自画像を描き始めるスタートともなるだろう。(略)

(はじめにから)

約束のあと

安倍晋三から
高市早苗へ



小川榮太郎 文藝評論家

日本は、まだ
終わっていない。

あれから14年――
安倍晋三の「約束」は、高市早苗に託された。

飛鳥新社

本居宣長

『直毘靈』を読む(十七)

すべて何れも、大らかにして事足りぬことは、さてあるこそよけれ。故れ、皇国の古は、さる言痛き教へも何もなかりしかど、下が下まで乱ることなく、天の下は穩ひに治まりて、天津日嗣いや遠長に伝はり来坐せり。されば、かの異し国の名に倣ひていはば、是ぞ上もなき優れたる大さ道にして、実は道あるが故に

道てふ言なく、道てふことなけれど、道ありしなりけり。そこをことごとしく言ひ挙ぐると、然らぬとのけぢめを思へ。(続く)

【現代語訳】

総じて、どのやうなこともおつとりしてゐて満ち足りてしまつてゐることは、さういふ状態であるのがよいことである。だから、天皇家のお血筋の尊敬する日本の国の昔は、そのやうな仰々しい教へも何もなかつたけれども、下級の下級の者に至るまで乱れる事がなく、世の中は落ち着いて治まつて、天照大御神の後継者(天皇の御位に即く者)は一層遠く長く伝はつてきてをられる。だから、あの外国の名称に倣つて言ふならば、是こそがこの上ない優れた“大きな道”であつて、本当は道あるがために道といふ言葉がなく、道といふ言葉はないけれども、道に相当する内容はあつたのでした。その点を仰々しく取り上げて言ふのと、さうしないのとの違ひを考へるやうにすることである。

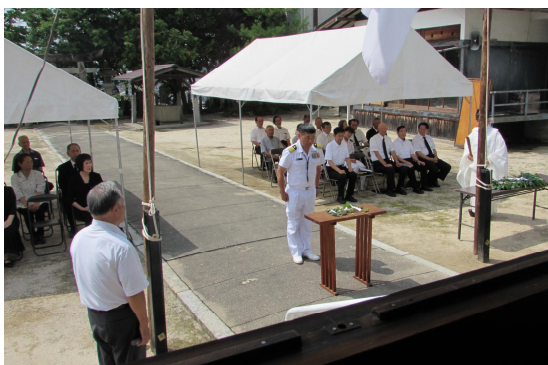
「昭和百周年」にあたり

先の大戦(大東亜戦争)の敗戦から八十一年目を迎へました。戦争を身をもつて体験した方々の減少の中、直接に話しを聴いてゐる団塊の世代は新たな使命をもつて、伝へていくべきと思ひます。父母から祖父母からそして、近所の方々から戦時の様子を聴いてゐる者も又減少しつつあります。二度と戦禍を我々の子や孫の世代に遇はせない為には、強くて豊かな国家でなくてはなりません。その役割が今の大人達の使命ではないでせうか。

【岩国護国神社みたままつり】



八月五日午前九時半、護国神社境内の忠霊塔御前において仏式にて法要。続いて神社拝殿において、「みたままつり」が斎行されました。祭典前に国歌斉唱し、約三十名の参列の中、宮司以下三名の祭員が着座。修祓・宮司一



拝・献饌・大祓詞奏上・祝詞奏上・詩吟の奉納・宮司玉串奉奠・責任役員以下参列者の玉串拝礼・撤饌・宮司一拝・閉式の辞。そして、宮司の挨拶がありました。挨拶では、これまで常に神社の総代長として、また、祭典委員長として尽力されてきた橋本尚理氏の急逝について悲しい報告がありました。拝殿正面には橋本氏が全県の護国神社を巡拝した折の各社の御札が祀られてゐました。長く県会議員としても活躍された橋本尚理大人の御霊の安らかならんことを心より祈念する次第です。